

「新派俳家句集」と「俳諧木太刀」

松岡満夫

明治時代に於ける二つの俳句集に對し解説批評を試みた。俳句集出版といふ仕事を通して當代の俳句界を眺める時、單に俳句の作風傾向を探究するよりも別な意味が見出せるように思つた。一つの作品が作られるにも色々な背景を持つてゐるが、一つの書が刊行されるにも亦その背景があるに違ひない。装釘なども時として内容を語る背景となることがある。で私はさういふ面をも考慮しようと努力した。結果から見れば俳句界への苦言となつてゐる點もあらう。とにかく私は卒直に二つの句集全體から受ける感じを記録しようとした。明治時代の新體詩、短歌、のアンソロジーは近頃河出書房から刊行され、好評であるが俳句のそれはまだ出てゐない。今後も出刊されにくいのではあるまいか。なぜならばかくの如きものも商業主義と結びつかねばならぬから、明治以後の俳句集が復刻されても余りもてはやされないのではなからうか。然し明治大正の俳書大系が編まれるとしたら、こゝに解説する二つの句集は第一の重要資料でなければならぬ。

一

こゝにわたくしは標題に掲げた二つの句集に就てその成立や性質などに考察を加へて見たい。それについて本題に入るに先だち、文藝と發表といふ問題を少し考へて見よう。凡そ文藝作品の價値は作品そのものにあるのであつて、その發表の手段様式を考へる必要はないともいへよう。小説にしろ詩歌俳句にしろ、わたくしたちはその作品そのものを見つめて居ればよいのであつて、新聞に發表されたものとか單行本として出されたものとかは問題にする必要がないともいへるであらう。文藝の研究は一般にかうした考へ方のもとに行はれてゐる。或意味ではそれが純粹の立場でもあらう。「二人比丘尼色懺悔」をそのまゝにその文章その内容を考へる、「金色夜叉」に對しても同様な立場で考へる。そこにこれらの研究は一應成立つ。むしろこれが研究の純粹の面であり、だから紅葉全集があればこの研究には事を缺かない。しかしわたくしたちは、色懺悔が新著百種第一號として單行本で出されたものであることを知り、金色夜叉が讀賣新聞に出されたものであることを知る時、かういふ有名

作品と出版様式との關係が色々考へられてくるのである。明治維新以後の文藝の展開と印刷との關係は、その印刷文化の力を過大に見るべきものでもなからうが、全く無視してよいものでもない。

今明治の俳句界を見るに明治二十五年を境にして、それ以前を舊派の時代、それ以後を新派の時代と分けることが出来るが、その舊派の時代の出版俳書は殆ど和装本であり、新派の時代は活版洋装本が大半を占めるといふ風に出版様式に於ても明かな區別が見出せるのである。又新聞紙といふ新しい機關が小説界などにはかなりの影響を與へてゐたが、俳句界に於てもこれが絶大な力を持つやうになるのであるが、それも矢張この二十五年を境にしてゐるといへる。新聞に俳句の載せられた最初は明治十三年一月の報知新聞である。作者は竹冷、一草で、このことは俳諧年表（竹冷、望東、麥人共著）に記録されて居り、明治俳句史上よく知られた事柄である。しかしこの事實があるからといつて俳句と新聞との關係といへば好事的な細い詮議は別として、まづわたくしたちは明治二十五年以前を考へるに及ばない。この年の六月に子規が瀬祭書屋俳話を日本新聞に載せたその時を俳句界に對して新聞の役割が重要になつて來た最初と考へればそれで十分である。又雑誌と文學との關係も明治文學研究上おろそかに出来ない事柄であるが、俳諧雑誌の最初のものとしては明治十三年の俳諧明倫雑誌をあげなければならぬ。明倫雑誌は俳諧雑誌ではあるが蕉風の明倫教會なるもの、組織されてゐたのを見ても分かる如く時代の影響もあつて多分に矯風の意味があつたが、それでも俳論方面で見るとべきものがないとは言へない。安藤和風や石鷺子の論の如き子規以前の俳論として注意すべきものがある。特に和風の「大小の辨」「點取及集冊」は前者に於て俳句小詩形無價値論に對する辨駁をなし、後者に於て點取業者を排撃して居り、これらはいづれも子規の思想の前驅をなすものであつたし、たゞ和風は舊派の中にあつてそれを唱へたために不成功に終り、子規は舊派に無關係に一個獨立に唱へて遂に成功したといふ相異があるだけである。かくの如く明倫雑誌も俳句史の上の一つの足跡を印してゐると思ふし、それ以後にも「初しぐれ」「黃鳥集」などの俳誌を見るが、しかしこの雑誌の面でも俳句と雑誌が離れ得ない關係を持つやうになつたのは新派關係の俳諧雑誌、「秋の聲」「ほととぎす」が出されてからと見られる。

明治新派俳句が非常な勢で大衆インテリ層に流布し、樗牛の如きは遂に太陽誌上に「俳句の流行」といふ一文を投じて「消閑の餘事」に文壇の壓倒されることを慨嘆したが（二十九年一月）、その流行の原因としては時代の復古的傾向、小説界の沈滞、日清戦争による人心の國粹主義的傾向等、考へれば色々なものが隠れてゐると思ふが、又新聞によつて助けられたことも否定出来ない事實である。これは日本派、毎日派といふ

言葉が作られたのを見てもわかる。俳諧年表の廿七年の條に

二月、小日本（新聞）發行、子規之に俳句を募集す、是よりして新俳壇漸く振はんとす。

春、毎日新聞に日々俳句を載せ始む、選者竹冷、後酒竹、松宇、

三月、角田竹冷、尾崎紅葉、讀賣新聞に俳句を募集す。

七月、小日本廢刊、俳欄を日本新聞に移す。

とある如く、新聞俳句の俄かに盛になつて來たのは大體廿七年に始まると見てよく、所謂俳句流行もこの年からである。もつとも、酒竹の俳諧年表（明治三十年十月發行、俳諧文庫第二編芭蕉以前俳諧集上巻に載せたもの）によると廿九年の條に「俳壇大に勃興し、全國新聞雜誌競つて俳句を掲げ始む」と書いて居り。そして廿八年の條には「俳壇復興の兆あり」と書いてある。酒竹のこの二つの記載と望東、麥人の俳諧年表の記載と比較する時、流行の年次が少しずれてゐるが、私は之を一つに合せて廿七年から廿九年まで、即ち日清戦役の前から後までが、明治俳句史上、最も俳句活動の盛であつた時期だと考へてゐる。そしてその俳句隆盛の事業は新聞によつて多くなされたのである。「黄鳥集」三十四號（明治二十七年八月）によると俳句俳話をかゝげる新聞雜誌は日本、毎日、中央、新朝野、讀賣、やまと、小日本、早稻田文學、女學雜誌、文學界、國民之友、志からみ草紙、學の友の如きものと言つてゐる。三十五年に子規が歿する迄は先づ新聞俳句時代と言つてよからう。子規の死後は新聞から雜誌へと移行した。

新聞にしる雜誌にしる、それらに載せられた俳句作品はその場限りの感を與へ易く、安値に受入れられがちである。新聞は日々出され雜誌は月々刊行され、そして俳句はそれらに目まぐるしく載せられて淡い感情を指曳させて行く。熱心な投句家はそれを保存して自己の参考に資するであらうが、大多數のものにとつてはそれ程の熱意は持てないであらう。新聞俳句にはかういふはかなさがある。雜誌俳句はそれに比すると割合に土臺がしつかりしてゐる。それは俳句専門の雜誌として俳句愛好者が多く讀者となるからである。新聞俳句から雜誌俳句へ移行した理由もこゝにあると思ふ。極堂が「ほとゝぎす」を松山で出版し、虛子がそれを東京に移して引繼いだ時、雜誌經營について子規は大いに危んだが、それは専門の俳句雜誌が賣れるか賣れないか、最大問題であつたからである。三十年後、どれだけの俳句雜誌が生れては又泡沫の如く消えて行つたかを考へるがよい。大新聞に據つて居れば、たとひ俳句欄はかすかであつても大新聞がその欄を廢止しない以上、寄生虫的存在ではあるが、

命長くつゞくことである。要するに新聞の俳句欄はわたくしたちの考へるほど力強いものではない。子規が日本新聞によつて有名になつたのはその新聞の俳句のためではなく、瀨祭書屋俳話に始る力強い俳論の力であつたと思はれる。それら俳論の影響が意外に大きく、ために日本派な一派が出現し、作品としての句は日々、月々に作りためられて行つた。勢の赴く所、やがてこれを整理し一冊の書即ち句集に編まなければならなくなる。さうして始めて、それら作品の存在價值が出來上る。廿七年にはじまつて廿九年に最盛となる流行俳句は誰れかの手によつて句集とせられねばならなかつた。子規及その一黨がいちはやくそれを考へ始めたのは當然である。^註「新俳句」は日本派のかういふ歩みが結實した、その第一句集であつた。日本新聞紙上子規の選に入つた句はこの「新俳句」に再びとり入れられて手際よく一まとめにわたくしたちは鑑賞することが出来るのである。しかるにその「新俳句」よりも先きにこの時代の句を編輯したものがあつた。それがこゝに先づ述べんとする「新派俳家句集」である。

二

「新派俳家句集」は假洋装、四六判、二百頁ばかりの小冊子、編者は近藤泥牛、その奥附によると、明治三十年十月七日印刷、同年十一月十五日發行、編輯兼發行者三好仲雄、發兌元白鷗社、發賣元東京堂とある。奥附に編輯者を三好仲雄とした理由は不明、本文のはじめには近藤泥牛編纂と印してゐる。表紙は上部に春の花下部に紅葉が流れの渦卷に浮いてゐる模様をあしらつてゐて、題字は醒雪の字かと思ふが或は編者自身の筆かも知れない。紙質は粗末である。しかし俳諧名譽談（幹雄、明治二十六年）、芭蕉俳諧祕録（虛幻堂、二十七年）、俳諧名家選（紅葉、二十九年）など皆この並びの書であるから、この句集は世間並みのものであると言へる。

編者近藤泥牛の閱歷に就ては私は何も知つてゐない。たゞこの句集の木暮の跋と泥牛が雑誌「ほととぎす」に投稿したものによつて僅かに窺ひ知るだけでそれによると大體下記の如くである。鬚男は彼の俳號である。恐らく彼の風貌を物語る俳號であらう。加州の士で、第四高等中學を中退後、上京政法を學んだ。一蹶江湖に落托し、困頓窮迫遂に仙臺に行き河北新報に入社した。たま／＼仙臺に佐藤紅緑（日本新聞社で子規と知りあひ、俳句趣味を吹込まれた日本派の有力俳人）あり、彼に教を乞ひ居る時、大學派の領袖佐々醒雪、元二六記者辻樵村らも相會し、一日鬚男の宅に參集、奥羽百文會を成立せしめたといふのである。百文會の成立時は三十一年一月中旬と思はれる。それから僅か半年あまり、即ち八月

上京し句集出版の計畫を實行したのである。日本派俳人として經歷の淺かつた彼が句集出版を企て、しかもその句集が日本派に限定されず新派全體に亘らんとしたので忽ち日本派より排撃を受け一敗地に塗れることになつた。「ほとゝぎす」一卷十一號の東都消息に

頃來近藤泥牛著「新派俳家句集」なるもの成る。竹冷紅葉等吾人の句に及ぶと言ふ。人或は其可否を問ふものあり。予答へて曰く、泥牛氏は鬚男の言ひなり。子は仙臺にありて紅綠氏の勸告によりて百文會の一員たりし者、俳句を究むること日淺く俳句を作ること其技を極めず未だ以て俳句に至れりとはいふべからず。其嗜好高からず。此くの如くにして自ら選抜の榮を荷はんとす。予は寧ろ其盲に驚く。予未だ其稿本をも見ずと雖も或は其見るに足るなからんかを怖る。殊に其著者に對して手段の陋劣なる殆んど言ふに忍びざるものあり。此くの如くにして抑も如何の好句集を得んとするか、予は其人を惡んで其衣に及ぼすものにあらずと雖も人或は其潜越の愚を笑はんとす。予は遂に其新派俳句集なる名に對して片腹痛しとなす。明治の句集は到底これ無かるべからず。然れども予等は竟に此くの如きの句集を以て甘んぜんとするものにあらず。俳句によつて榮利的企をなさんと欲せばまた此くの如きの廉恥心をも打破し陋手段をも用ゐざるべからざるか。予は唯だ此くの如きの句集が後世詩人の手に残るべきを恥づ（下略）

とあるが、この高田屋客の非難の峻烈なるを想ひ見るがよい。泥牛は同じホト、ギス誌上で「只だ楷梯として、初學の伴侶として、傍ら余の參考として」出版するのであつて不完全なるは已むを得ずと辯解したり、又「余はまさに進んで「新派俳句作法」をも編纂せんと思へり、一二の人に制せられて筆をとゞむる如き腰弱には候はず」と強氣な口吻をもらしたりしたが日本派の怒を解くすべはなかつた。作法書は結極出版してはゐない。「ほとゝぎす」一卷十七號の金城消息に「鬚男の泥牛君近頃若越自由を辭して當地北國新聞に入社復た俳を談せずと聞及候」とあるあたりがこの事件の一應の結末であらう。たゞ子規の歿後直にこの句集が復刊されてゐることが一寸氣がゝりになるが、俳句界は再びこの書を顧みることとはしなかつた。復刊のものは明治三十五年十二月廿日求版印刷、三十六年一月五日發行で發行所は松陽堂となつてゐる。又諸家の序跋も眞蹟短冊縮刷も削り去つてある。

知十の「俳諧風聞記」によると子規が「咄嗟の間に多くの同調者を得て一團體をなす」に至つた理として

一、郷黨關係によつて固めたこと（伊豫派）

二、新聞「日本」が青年間に勢力を持つてゐたこと

「新派俳家句集」と「俳諧木太刀」

三、俳句の口調が青年の心に訴へたこと

四、格調が高雅で斬新であつたこと

五、諷刺の意を寓したこと

をあげてゐる。こゝで二以下は暫く問はない、一に就て考へて見よう。子規が郷國の師弟親戚朋友の由縁によつて支持されてゐたがために之を封建的と評する考へ方がある。わたくしは之を否定するのではないが二十九年、三十年頃になると日本派も全國的に擴がりを持ちその中の有力俳人も子規の郷黨には限られてゐなかつた。にも拘はらず子規によつて固められたこの俳集團は益々鞏固で、虚子、碧梧桐の所謂其、嵐に相當するものゝ活躍があつたとはいへ他の入り込む隙もなかつたわけである。そこへたまゝまぎれ込んだ泥牛は分際以上の事を企て、あげ句は追ひ出される仕末になつたのである。しかし子規が郷黨の上に立つてゐたからそれを封建的と批評するのは少し修正の必要がある。郷黨と共に出發したのは、子規の交友關係がしからしめたと思はれ已むを得ないことであつた。もしも封建的といふことを言はうとすれば俳句そのものにその性質のあることを認識したい。

由來俳人は集團の中に生活してゐる。芭蕉も蕪村も例外ではない。俳句を作るといふことは勿論個人的勞作である。がさて個人的に俳句を作つて生涯を終つた俳人は割合に稀である。俳句活動は一人の指導者のもとに集團が作られ、その集團の中から新しい有力者が出る、とやがて先の集團から分離して新しい集團を作るといふ一つの生活運動である。たとへて言へば蜜蜂の分封の如きものである。之は俳句の持つ本來の性格が然らしめるので意識するとしないと拘はらず俳句にたづさはる者はかくなる運命にある。したがつて俳人の行動はすべてこの集團の中で適度に行動するのが最も自然である。泥牛は俳句文藝のこの性格を認識出來ず、勝手な行動に出たために排撃を喰つたのである。勿論泥牛は陋手段によつて賣名行爲に出たものと思はれる。その陋手段が何であつたかわたくしは知らない。高田屋客がはつきり言つてゐるので私もそれを認め度いのである、一方的に認めるのは弊害があるが臭みのあることは否定出來ないやうだ。日本派の第二句集「春夏秋冬」が子規によつて出される時それによつて修竹が「明治俳句」を編輯してそのため矢張泥牛事件と同じ結果に終つたことを注意したい。

「新派俳家句集」を見るに序文には竹冷、醒雪、酒竹、鏡花、犀東、の名が見え、跋文には蛇足、露月、木莽、紅緑の名が見えてゐるが子規の名は見えない。虚子、碧梧桐、鳴雪の名は無論見えない。露月、紅緑は日本派の有力俳人であつたが、この句集が日本派から支持されてゐた

のであつたなら恐らく、子、虛、碧、鳴、四人のうち一人位序、跋を寄せたであらう。諸名家眞蹟短冊縮刷を挿入してゐるがその諸名家は、紅葉、竹冷、酒竹、小波、醒雪、子規、紅緑、極堂、墨水、海舟の十氏である。海舟の入つてゐることが少し氣にかゝる。賣名の臭味はこんな所にあるのかも知れん。

序文のうち、竹冷、醒雪、酒竹のものは直筆を印刷して此の書の體裁を飾つてゐる。鏡花、犀東、及び跋文は活字印刷である。序、跋の多いことも此の書の特徴で鏡花のものがあるのも目をひく。同郷の好しみてあらう。醒雪、紅緑は百文會の同志であるから一筆執つたといふ所か、竹冷、酒竹があつさりと頼みを受けてゐる所も竹冷の主義、酒竹の手柄から頼かれもする。これらの序跋を讀んでゐると當時の俳壇の風調が考へられて興味が湧く。竹冷は「春雨に綱を引出し彼れに小提灯持たせ候手際を領かるゝ人もあらばともに俳句を談ずるに足るべく」と言つて蕪村調流行の中にゐた彼の趣味を語り、醒雪は「三年味會はふるきが爲めにたつとばれ、どぶ漬の香は新しきにめてらる。新しきものよきか舊きものたつときかわれこれをしらざるなり。唯生來ひね澤庵のすつばきを疾みて常に新漬の青きを愛す。わが俳道の新流をよろこぶもの亦これに似たり」といふ如何にも學者派らしい觀念的俳味に浸つてゐる。酒竹は素直に現代の復興を安永の復興に比し、この句集必ずしも新派の見本とはいへないがこれを行末の手ほどきとしようとして述べてゐる。犀東はこの句集を新日本の犬筑波といひ、新派犬筑波とも名づけた。紅緑は俳諧に門派なしと説く。面白いことに泥牛はこの紅緑の跋論の門派なしと説く所に一々圈點を附けてゐる。その二、三をあげて見よう。

文學には門派なし、其すぐれたるものは只だすぐれたりとなすべきのみ。

彼等（月並者流）の作句といへども優れたるは優れたりとするに躊躇せざるべし。

門派を構ふといふことは無益の事たるのみ。

泥牛は紅緑の跋文を借りて門派なしといふことを、暗に日本派に對して主張しようとしたのであらう。紅緑は俳人で終始する人物ではなかつたが、彼と雖も職業俳人ともなれば門派の必要を嫌といふ程知らされたことだらう。ともあれ門派なしといひつゝ、その門派の下に屈したことは事實であつた。

三

「新派俳家句集」の内容を見るに、總論と東京及地方の俳句界と新派俳句作例との三部に分れてゐる。總論では新派派の發生、新舊俳句の相異、子規の圓滿なる俳想、虛子、碧梧桐の變調、碧虛と鳴雪の違ひ、酒竹の博覽などに就て述べてゐる。さてその總論で述べてゐることに言ひ分はないが、それがすべて彼一個の意見でなく子規らの俳論の受賣りである所に物足らなさがある。子規の優秀をたゞ、初學の参考にその作品、俳諧廿四躰を借用するのはよいが、雅樸體と妖怪體とを落して廿二躰になつてゐるのは杜撰である。又子規に對して「彼の俳才は神の如く到る處通ぜざるなく、彼の俳想は及ぼす處として達せざるはなし。神韻飄渺として天地に洽ねく詩神詢逸して彼と遊ぶ。彼は芭蕉蕪村を経て第三世に俳神の金冠を戴かんとしつゝあり」と述べるあたり子規を神格化して絶對歸依を叫ぶやうである。もしさうでなかつたらたゞの媚態に過ぎない。又酒竹を總論で特に取り上げ論じたことは子規論と對照して不思議に感ぜられる。勿論酒竹は泥牛のいふ如く俳書蒐集家でその道の研究家として名があつたには違ひないが酒竹を取り上げる位だつたならばむしろ子規に對するものとして紅葉か竹冷かを批評して貰ひたかつた。彼の批評が純粹に冷靜に當代俳壇を剔抉する立場に立たず賣名的媚態的立場に立つたがためになくなつたのであらうか。碧虛鳴雪に對する批評にしても子規の論の借用に過ぎない。要するに總論は編者泥牛の批評眼を疑はしめるものに過ぎない。

次に東京及地方の俳句會の部を見るにこれこそ此の句集の最も特色をあらはすものと考へられる。各地の俳句會の成立、現狀を述べ代表作家の句を集めてゐる。その句會は秋聲會派系のものとはつきり分れ、その間に大學派が介在して當時の新派俳壇の概況を知ることが出来る。今そのあげてゐる句會の名前を示すと、秋聲會、紫吟社、木曜會筑波會、五月會、根岸會、京阪俳友滿月會、伊豫松風會、北聲會、越友會、碧雲會、奥羽百文會、の十二である。秋聲會は竹冷社中、紫吟社は紅葉社中、木曜會は小波社中、筑波會は大學派、五月會は早稻田専門學校の會、根岸會は子規社中、以下日本派系のもの、これらを集録したことはとにかくよき文獻であるといへる。當時の新聞雜誌によらなくてもこの句集によつてこれらを通り知ることが出来る。泥牛もこの方面にもつと力を竭して澤山集録して置いたなら後世に傳へらるべきよき句集となつたであらう。子規も「明治三十二年の俳句界」の附記に「俳社一覽表抄」を載せたがそれは句會の名前だけでその作者作句を覗ふことは出来ない。俳句雜誌にこれら地方句會が記載されることになつて來たがそれは句會現況を知る必要が然らしめたのであらうか。地方句會が輕視出來ないことは伊豫松風會から雜誌ほとゞぎすが生れたことを見ても分かる。

そしてこれら句會の例句としてあげたものも決して興味を引かないものではない。よみもて行けばそれらの會の特色が覗はれて面白い。秋聲

會、紫吟社、木曜會、筑波會、五月會の如き會員夫々相交渉して居て日本派以外のこれらの結社のあり方が見られる。それが又俳句界の所謂集團生活の特色を物語つてゐて面白い。「新俳句」からはいくらよんでもかういふ彼らの俳句生活は浮出て來ない。即ちたゞ作品あるのみである。「俳家句集」には作品の外に作者の行動がある。泥牛はもつと克明に之を寫し取つてくれたらよかつた。

最後に新派俳句作例の部に就てであるが、これは春夏秋冬、各二百五十句の一千句集である。但し、實數は九九一句しかない。大體日本派作家が中心であるから「新俳句」といふ日本派代表句集がある以上なくもがなの感が深い。日本派以外の作家のものをもつと澤山集めれば特色があらはれてよかつたかと思ふ。句に就ては「新俳句」所載のものと重複してゐるのが可成あるが、句集の性質上已むを得ないことであつた。しかしその重複した句が作者を異にし、敘法を異にしてゐては一體いづれに信を置けばよいのかといふ疑問が生じる。今作者を異にする句を春の部だけから抜出して見よう。

長閑さのはては曇りて暮れにけり	紅	緑(墨水)
美しき顔を揃へて茶摘かな	戯	道(其村)
汐の干てきたなき泥や橋の下	李	坪(其村)
傘さして露の蠶剪る女かな	犀	東(蜻蛉)

括弧内は「新俳句」のものである。同一資料に基くと思はれるのに早くかくの如き相異を來たす——芭蕉の句に誤傳のものがあつたりするものも無理はないと思ふ。敘法の異なる例を矢張春の部から取り出して見る。

出代の(や)花と答へて跋なり	漱	石
旅人の海に石投げる日永かな(日ぞ永き)	岐	山
大方は青きものとなりて春の行く(春行きぬ)	極	堂
早蕨のつんちくりんと(握るものなく)延びにけり	紅	緑

括弧内は「新俳句」のもので、これらの敘法の原作はいづれ、優劣は如何、漱石の句は「出代や」が正しく、紅緑の句は俳諧紅緑子(明治三十七年刊)によれば「握るものなく」になつてゐることを一言して置く。要するに「俳家句集」の俳句作例を全體から見ても抱く感じは杜撰といふ

ことである。季題でも

桃散りて櫻さかりなり矢部の郷 李 坪

の句を桃花の題に入れるは妥當でなく「新俳句」では正しく櫻の題に入れてゐるのである。かういふ缺點は他にもあるが省略して置く。

句風といふ側から作例の部を見るに流行調を主體にしてゐることが覗へる。この頃の流行調といへば漢詩調、字餘りなどが中心で、總體に無雜作過ぎる詠み方と言へようか、そしてそれは「新俳句」に於ても豊富に見られるところであるから、此の句集の特色とばかりは言へないが、なほ比較的に見る時はこの方により多く流行調があると思へるのである。更に注意すべきは米人ブイーの句として

月の前 二十 八 宿 星 の 宿

があげであることで、俳句の流行は外人までに句を作らしめ且それを句集にまで載せるやうになつたのである。「俳諧年表」(麥人、望東)の廿九年の條に「此頃より清國人に俳諧を始むる者多し」とある。秋聲會には蘇山人といふ清國俳人が居り、この人の句は「俳諧新潮」や「新俳句帳」など秋聲會系の俳句集に見える。そうした人の出現する下地は既に廿九年頃にあつたので、米人ブイーもさういふ情勢にあらはれ出たのであらう。要するに「新派俳家句集」は當代の俳壇の人的活動面を不十分ながらとらへてゐる。その意味で珍しい句集といへないこともない。

四

「俳諧木太刀」は四六判一冊、假洋装本文八八頁ばかりの小本、四百頁に餘るかの「新俳句」と比較して、瀟洒といふ感じの絡はる書冊、明治三十一年八月廿六日印刷、同年八月廿九日發行、著者角田竹冷、發行者和田篤太郎、發行所春陽堂とある。

「俳諧木太刀」は秋聲會派の第一句集で、日本派の「新俳句」に對立するものである。「新俳句」よりも五ヶ月ばかり後れて出版されて居り、恐らく競争意識が働いてゐるものと思ふ。明治三十年から三十一年にかけては句集出版時代といふべく、先づ三十年六月に明倫叢書「鱗集」出て、續いて十一月に「新派俳家句集」三十一年の三月に「新俳句」と相ついたのであるから、「俳諧木太刀」も出づべくして出て來つたものと考へるのである。竹冷はその著、聽兩窓俳話の中の「福地櫻痴居士」で「自分が明治二十八年中選みて出版した俳諧木太刀といふ句集」と述べてゐるがこれは記憶違ひであらうか、三十一年の出版が事實であるから、廿八年の選びでは選んでから出版まで三年の開きがあり、少し不審に

覺える。然しこの書の凡例に

本書は早くより心掛けたりが障る事ありて長き月日を空過せり、されば世に云ふだら／＼急にもせざるまゝ、杜撰のふしも多かり

と言つて居る所を見ると選句に取り掛つたのは割合に早かつたことを認めてよい。廿八年に選み始めたとすれば新派俳句集編輯の第一著手の功は竹冷にあることになる。然し私は廿八年に對して尙疑問を抱くものである。秋聲會の結成が二十八年十月五日となつてゐることを考へると二十八年の選びといふを信じがたいし、事實、秋聲會の機關誌、「秋の聲」が二十九年十一月に創刊され、それに毎號會員の句がのせられて居り、その中の句でこの句集にのせられたものがかなりあるのを見れば明らかである。しかも後に述べる通り同人の自選句から編者が更に選んだことを思ふべきである。思ふに日本派の「ホト、ギス」より二ヶ月ばかり先だち、何事にも競争意識の強い俳壇のこととて句集編輯に於ても竹冷らの心の底には日本派に譲り得ない氣持があつたのであらう。

「秋の聲」は惜しくも一年にして廢刊されたが、その後この派の機關誌として「俳藪」「文藪」「俳聲」等次々に現れては消え、遂に三十六年一月「卯杖」出でそれが四十二年四月號より「木太刀」と改題されて昭和の今日にまで及んでゐる。「木太刀」と改められたのは彼らの第一句集が「俳諧木太刀」であつた、それを記念する意味であつたと思ふ。これほど記念すべき句集、それが初版のみで再版されなかつたのは何故だらう。それは讀者が少なかつたこと、即ち當時の俳壇勢力としては日本派に及びもつかなかつた爲である。「新俳句」は版を數回重ねてゐる。出版社として春陽堂、民友社は文藝物を出版する點では相韻頗してゐたのであるから、これは問題にならない。要するによく賣れなかつたのであらう。鶉澤四丁が「思出るまゝ」で

いつぞや竹冷氏曰く『木太刀は絶版にて一冊二圓といふ相場それも殆ど品がないのです』價二圓出すべしといふも實際に品切にはいたし方なく俳聲社にては再版の企ありしといふがこれも早速の間に合ふものにあらねば寫本するものなか／＼に多しとぞ、わが案山子吟社同人にて木太刀の寫本三冊あるを知るなり、ろくでもなき駄文字の臚列せられたる三文文學とやらいふものすらたちまち活版に昇る世柄なるにさりとはまた古風なることもある哉

と言つて居るを思ふがよい。竹冷の語つたのは三十四、五年の頃と推せられるが古本價が二圓とは驚く外ない。木太刀の定價は拾五錢であつた。それでも再版の段取とならなかつたことは秋聲會派の勢力小なりしによるものと思ふ。それでも秋聲會同人が木太刀をどれほど懐しんだかは同

じく「思出るまゝ」に

去々年の春なりけん（明治三十三年か三十四年）借宅庵愚佛子が東都の庵に小集の會が開かれるとき皆さん珍らしきもの御目に掛けんと誇顔に示しけるもの二つあり、一つは（略す）、猶一つは俳諧にかゝはる種々の新聞の切抜を貼り付けたる帳面なりけり、その中に道場に木太刀二挺掛けたる畫ありて『俳諧木太刀』と紅葉子の筆なる春陽堂が木太刀の廣告ありて恐らくこれは誰の手にもあるまいとぞ愚佛子のほこりける。實に珍らしきものかな

とあるのを見ても知れよう。木太刀は秋聲會派にとつてはかくの如く忘れ難い記念すべき句集であつた。尙今少し解説を試みよう。

五

「思出るまゝ」に

木太刀出版當時は秋聲會同人の間に己が句の少く載せられたるをこぼしたるものありしとの風聞ありき、否木太刀の選句方を難じたる一文を新聞に寄せたるものありしと覺ゆ、某子の句は總數何句にて己が句は何句也、甚だ少し、殊に編者の句の割合に多きに過ぎたりなどそれはくゝやかましき事なりきとぞ

とあるが如何にもありさうな事である、此の句集には編者の好みで作者數も總句數も明瞭に記載して居り、それによると作者九拾四名、句數通計三百二拾壹題七百四句となつてゐる。句數の實數は私の計算によると三百拾八題七百二句となり少し差があるが、その誤差の理由はすべて不明である。この實數七百二句の中、編者竹冷は八十句、紅葉、四十五句、小波、三十八句、愚佛、三十六句、酒竹、二十七句といふ順で、殘花、知十、潭龍、飯人等有力同人等皆十句以下である。日本派俳人牛伴の句も一句入選、その他一句入選の作者十四人ばかりある。竹冷の一族、四三子、二十句、榮子、六句、千枝子、九句、といふ風で同人の間から不平が起るのも必然であつたらうか。「思出るまゝ」の筆者は更にかく言ふ。木太刀編輯の材料としては編者が偏く秋聲會同人に檄して各得意の句何十句以内を送られよとありしと覺ゆ也、昔より此宗匠の棒にしたるものが彼宗匠は透逸に抜くことありがちの事也、されば各得意のつもりにて編者の目には甚だ不感服なるものありしなるべく爲めに割合に少きものあるべく編者自身の得意の句は洩れなく組込まれ隨て句數の多きは知れたこと也、總じてこれが秋聲會の特色なるべく一層の事に恨み

つらみのなきやうに各自半生の句集を出すべしと誰やらが言ひしことなりき、

俳句生活の性格をよく言ひおほせてゐる。雑誌「秋の聲」や新聞毎日、讀賣などの俳欄から選抜したのではなく、各作者の自選句から更に竹冷が選り取つたものらしいが、非難の聲があがつたのも一つはかういふ方法が原因してゐるであらう。しかし一方では竹冷の好み可成濃厚に盛り込まれてゐるともいへる。凡例に「之を選むに固より誰の句彼の句といふに頓着すべきにあらざりけれどひそかに期する所に便よければ暫く秋聲會員諸子の句中より選みたり」といへる如く、純乎としてこの集が秋聲會を代表するつもりであつたことが知られ、同時に竹冷の趣味で固められたことを思ふのである。^註勿論「會員の助言を受けて大に利益を得たり就中紅葉大人の勞を多とす」と言つて居り、紅葉を無視することは出来ないが、紅葉の助言は句集の編輯や體裁上に關するもので選句はあくまでも竹冷個人の責任であつたと思ふ。竹冷趣味にちよつぱり紅葉の色彩を煮染ませたものが此の句集の風味であらう。

六

此の句集の編輯様式及び體裁に就て考へて見よう。先づ竹冷は凡例に

披閱に便せん爲巻首には總目次及類題を掲げ巻尾には作者九十四人の姓名を付したり

といふ。巻首に總目次及類題を掲げること何れも目新しいことではない。但し通計三百二拾壹題七百四句と統計を示したことは彼らしい。かういふことは餘り例がないやうだ。巻尾に作者九十四名の姓號をいろは順に並べたことも行届いてゐる。從來の類題句集で作者を出身地別に示すことは例が多いが、姓をも掲げることはいささか少い。子規が「新俳句」に於てかゝる點を無視したに對し、竹冷は案外に細い注意を配つてゐる。「新俳句」が茫洋として大きく感ずるに反し「木太刀」が細身作りの感じてゐるのは必ずしも句集の量的相異によるばかりではあるまい。又竹冷は選めるのみにて心はずめども之を編輯せるからには世人の見て作句の便にもとおもへば類題と爲すにしかじと因りて一月より十二月迄に題を分ちたり春夏秋冬の部を置きしは其時節に互れるものを集めしのみ

といふ。これは太陽曆によつて季題を配列し直したことを指すのであつて、例へば一月の中に新年と冬季を入れるが如きで、二月からは春季にしてゐるが四月も尙春とするといふ風に大體太陰曆の一月ずれにしてゐるのである。これに對しては福地櫻痴が竹冷に書翰を送つて絶讃してゐる

る。即ち「詮ずる所は春夏秋冬の季節は十二ヶ月に對してきちりとあてはまらぬものに候ふ、去れば劣生は春分より夏至迄を春とし、夏至より立秋までを夏、立秋より冬至までを秋、冬至より春分までを冬と大凡に定めなば稍々其當を得べしと存じて常に筆とり候ふにも其如く心得て獨り極いたし候ひつるが今木太刀を閱するに、老兄にも同じ御考と見えて大に同意を得たるを喜び、殊に其季候々々の選題に關して御用意の周密なるに服し御苦心察したてまつり候」といつてある。この書翰は紅葉が竹冷の所から一時拜借といつて持ち歸り、その評を不殘、三十一年十月卅一日の讀賣紙上に掲載したといふことである。竹冷もこれは自讃してゐたらしく後に聽雨窓俳話中に櫻痴との交際を追憶し木太刀評を紹介してある。然し季題のかくの如き取扱ひ方は既に一年前舊派系の「鱗集」に於ても試みられて居り、この集には竹冷、紅葉、愚佛らの句も見えるのであるから、竹冷はそれを知つて居た筈であり、隨て櫻痴は知らなかつたとして、竹冷に於てはそれほど自讃すべきものでもなかつた。「新俳句」では新年は四季から取離して居り、各季を上中下に分けて、その限りでは月分けと相異はないと思ふが、たとへば七月といふ季題を秋に入れて、それを文月とよむことによつて不合理を感ずることはないとしても、事實の曆の上での七月と異つてくることいふまでもない。この不合理を除くためか、子規は「春夏秋冬」で別の分類法を用ひ、紅葉も亦「俳諧新潮」で大體子規と同じ分類法（天文・地理・人事・動物・植物等の分類）を用ひたが、思ふに俳諧文學が季節を離れて成立たない限り、かくの如く季題の整理に苦心することは俳人の宿命であらう。「俳諧木太刀」に於ける竹冷の試みもその苦心の一つであり、少くとも新派仲間でかゝる試みをしたのは彼が最初で、その勞は買つてやるべきであらうか。然し木太刀後の句集で木太刀にならつたものは餘り見當らない。これも木太刀が俳壇に餘り影響力を持たなかつたことを語るものであらう。

季題に關し竹冷は更に

中頃迄は大根引も竹植る事も季題にはあらざりしを今はその事すら知る者稀になりたり。おもふふしありて此選には夏休、潮浴、金魚、ラムネ、蕉實^{バナナ}、秋の日、衿卷、等を題として入れぬ

と述べてある。新季題採用は當時の俳壇共通の問題で「新俳句」でも夏帽子、クリスマス、吾妻コート、焼芋等を入れてあるし、「思ふふしありて」といつて勿體ぶる程のことでもなかつた。俳諧が絶えず新しい季題を發見して行くのは俗の美化といふその根本性格に根ざすものである。竹冷の此の集へ採用の新季題も秋の日を除いては江戸時代と異なる明治時代の新風俗を示すものである。秋聲會同人の森無實も「秋の聲」二號に「古き儀式、古き道具などを題詠する間はとて古人の言盡したる後に於て其より旨きことの考付くべき筈なし、之を避くるにはアイスクリー



ム、焼芋、招魂祭、耶蘇祭、など近世の物事を季寄の中に編入して其の範圍を擴張せざるべからず、秋聲會にても曾て「軍陸始」てふ新題を出したることありしが一度限りにて廢され以後復た新題の出でたることを聞かず」といつた。古人の詠み得なかつた新しいものといふ意味での新季題採用で、これが正しい態度であるか否かは疑問であるが、彼らがこの問題に苦心したことは事實である。聽雨窓俳話中の「俳句と新題」の一文をこの参考として掲げて置く。

明治二十八年に秋聲會で夏休、潮浴、金魚、ラムネ、バナ、等を夏とし衿卷、焚火等を冬とした。秋の日といふのを題として詠じた人もあるが之を判然季題としてゐる書が少ないから夫れを確定した。其後流水を春とし蟹を夏とし更に夏障子なるものを季題とした。是は絹でも紗でも此様なものを貼つた障子である

かくして出來た新題の句必ずしも名句ではない。新題と句のよさとは別である。

夏 休 柔 術 習 ぶ 男 かな 千 枝 子

松 蔭 や 潮 浴 び 足 り て 人 眠 る 志 つ か

秋 の 日 の 一 矢 に 暮 る 、 小 的 哉 紅 葉

七

此の句集は微々たる小冊子であるが「新派俳家句集」に比較すると紙質もよきものが使つてあり表紙にも擬り性の跡が見られ、挿畫も十六枚ほどあり讀者の趣味に訴へてゐる所なかなかよい。しかしその趣味が新鮮であるかといふと「新俳句」に比較して何となくすんで居り、やがてそれが内容である俳句の趣に相應じてゐると思はれるのである。

「俳諧木太刀」の表紙繪は樺色の地に白く浮見堂が浮き出てゐて水上に雁が數羽遊泳して居るところ、空には雁が鍵なりに飛んで居り、遠景に比叡が見え、遙か沖に白帆が一二三四と連つてゐる。空飛ぶ雁は表紙から裏表紙にかけて、遠帆は裏表紙だけに描いてある。表紙と裏とを一體にして装釘してある。その繪模様から受ける感じは靜かて落ち付いてゐる。日本畫風の瀟洒な趣である。悪く言へば風雅に溺れた感じ、若々しい潑刺さがない。之を「新俳句」の表紙繪と比較して見よう。「新俳句」のそれは地色のえんじの中に（地色は版によつて異なるが今三版のもの

のによる)新俳句と書いた白い紙が浮き出されてゐる。それが紙であることは左肩が折れてゐるので分る。廣い野邊に「新俳句」を掲げたやうに見える。といふのはその「新俳句」の揭示紙を左横、下、右下と三ヶ所にわたつて董の花が取り巻いてゐるので知られる。一口に言へば淡白である。然しそこに俳句的ではあるが若々しい浪漫的な氣息が漂うてゐる。(寫眞参照)

この二つの表紙繪の相異がやがて兩者の俳句の風味の相異を物語つてゐる。「木太刀」も「新俳句」も挿畫があるが、その挿畫に於ても兩者の趣味の相違ははつきりしてゐるやうである。竹冷は凡例で「畫伯たる川村雨谷翁は松下庵烏黒として會員の先輩たり、本書は翁の挿畫の爲頗る光彩を添へたり」と言つてゐるが、その繪が發する風味がやがて此の句集の趣と一致してゐることには、彼竹冷も氣付いてゐなかつたかも知れない。さてその挿畫數は十六枚ほどあるが、所謂型にはまつたものといふべく、何となくおとなし過ぎて覇氣に乏しい。一言で表現すれば床の間趣味、又通俗趣味といふ所であらう。表紙繪も雨谷のものではなからうか、今畫材の二三を擧げて見ると梅に竹に鶴(提重と瓢箪とコップがあるから梅見を思はせてゐる)、二見ヶ浦の夫婦岩、波に鳥、池に鴨、藤の花に蝶、などの如きである。これら多くは半頁を使ひ掛軸風のものである。

「新俳句」の挿畫は三十枚で、その全體から受ける感じは表紙繪と同じく浪漫的新しさ、若々しきがあり、同時に野趣と俳味に横溢してゐる。例へば福引に景品の二股大根を一人の羽織袴の男が高くぶらさげて示してゐるもの、又菅笠を首にかけた草鞋ばきの男が神前のこま犬に跨つて叫んでゐるもの等は野趣、俳味をあらはすものだらう。又春の野の董にキューピットが接吻して居り英詩がその下に掲げられてゐるもの、これは浪漫的なものを示すのである。これらは遂に「木太刀」では味はへないものであつた。因みに表紙の「俳諧木太刀」の題字は紅葉の流麗な筆であり、「新俳句」の題字は子規の例のとぼけた名筆である。

たゞの俳句集の出版に過ぎないがその裝釘、挿畫に於ても既にその趣味がにじみ出るのでから不思議である。それにしても床の間趣味の生れた原由は何か。それに就ては既に秋聲會の一員知十が指摘した如く、秋聲會の俳諧が閑俳であつたからである。今知十の評論はしばらく擱く。秋聲會の連中が多く本職を持つてゐる片手間仕事として俳諧に遊んだことは否めない。竹冷も辯護士を職とし、後には政界にも出てたりして、俳諧は彼にとつて二義的なものであつた。まことさういふ立場が「木太刀」一編に表はされてゐるといへる。竹冷は早くから俳諧の道に入つてゐたが、根が遊閑的であつたから、舊派の人々と親しみ、新派が勃興するに及びそれにも參加して、俳壇を公平に眺め渡さうとした。この「木

太刀」の凡例に「俳句に流派なきは深く信ずる所」といつてゐるが、これは彼が終生變らざる信念であつたらしく、明治十五年四月頃、幹雄老人の春秋庵で俳諧に城壁を構へ、俳派何流といふが如きは心得がたしと論談してゐる。「秋の聲」第一號聽雨窓漫語にも、「卯杖」一巻一號にも、亦後の聽雨窓俳諧にも同じ考へが述べられてゐる。一つ一つその引用は避けよう。理論としてはかゝる立場は正しいものと考へられる。しかし俳句活動はかゝる公平理論のもとには無力であることは當時の知十が聲を酸くして論じてゐるところである。知十としては日本派の隆々として榮えゆく根據は分り過ぎるほど分つてゐた。竹冷がいくら流派無用論を唱へても俳壇の歴史は流派の起伏を作つてゐる。では竹冷は獨りを樂しむ作家であるか。しからず。世俗的な彼は人なみに日本派を嫉視するので、「木太刀」はまさに現れるべくして現れたのである。流派は無用だが「風調に高卑のあるべきは固よりなれば、今の時に於て注意せざれば如何に成り行くやらん。心痛の餘り期する所ありて此選を公にはなせり」の言葉はかゝる立場にある竹冷にして言へるものであらう。調の高卑雅俗も彼の常によく論じた所であるが、作品は果して彼の持論通りであつたか疑問である。彼は五元集を尊敬してゐたが、彼の作には其角のやうなユニークな強さがない。ユニークな味は彼よりもむしろ紅葉に多かつた。この「木太刀」に於ける二人句を見てもそのことがいへる。

八

「俳諧木太刀」の作品評は櫻痴以來先人のものがしばしばあるが、櫻痴の評にも見當違ひはあるやうだし私は私なりに考へた所を簡単に述べよう。先にも言つた通り、この集は竹冷と紅葉の風味を八分三分に搗交ぜたやうなもので、こゝでは此の二人の句を取り上げれば足りる。

明治三十年前後は俳壇はあげて蕪村熱時代である。「新派俳家句集」の序に竹冷は春雨に小提灯の手際を顔く人てなければとも俳を談ずるに足らんと言つたが、まさに彼もこの時代の風潮に卷込まれてゐたのだ。「木太刀」を見れば

殘雪や如意輪堂の椽の下

戀猫をいたく打ちたる女哉

行雁や江口の君のうしろ影

氷室守京に縁者を控へけり

觀音のぬれて在すや木下闇

等明かにその蕪村風を窺ふことが出来る。けれども蕪村らしいだけで詩情に乏しい。飯人の

水ちよろ／＼若菜のあはひ／＼哉

の如き蕪村模倣の鶴であらう。かゝる傾向は「新俳句」にも勿論あるが、それにはこの缺點を補ふ他の若々しい新調があつたが、これにはそれがない。卷頭の竹冷の句

一月の寒さは椽の廻り哉

は思ひ切つて落ち着いた句調を誇らんとしたのであらうが、惡落ち着て風雅に胡坐をかいてゐる心持がある。「新俳句」の卷頭句は

元日や寺にはいれば物淋し 碧梧桐

である。相較べて見るがよい。竹冷の蕪村熱はほんの一寸の間で聽雨窓俳話によると彼の理想は元祿の盛時でそれに安永、天明を以て補ふと言つてゐる。そして排するものは舊派の月並調、細字調、であるといふのだが、「木太刀」にはその舊派調が見られるのではあるまいか。例へば

今日は起きて聞くものにせん初鳥

漣を見に出て居るや春の風

朝貞は盛久しき櫻かな

商人になりて朝貞の盛かな

伏す時がそも／＼強し雪の竹

の如き、さすがに舊派と交渉しつゝ育つた彼であることを思はせる。彼は調の卑を擯けつゝ時として卑に居るのである。調の高きに居むとして低きに落ちたるものと好一對である。例へば

探梅の翁頭巾にして座せり

春の夜や老道士書を枕にす

門跡へ昇込む牡丹重げなる

帷子や客盆石に跪く

の如きをその證として私はあげる。これが極端に發展して

庭前に菊あり庭後に酒庫あり

脇息や絹足袋の紐解かせける

應と云ふ玄關深し桐火桶

の如くなると嫌味を通り越して批評のしようがなくなる。私は之を大名の句、權門の句と呼ぶ。

紅葉の句にはさすがにかくの如きはない。彼は小説家であるが、彼の藝術は想の藝術でなく言葉の藝術であつたといはれ、彼の俳句もそれをそのまゝあてはめてよい。とりわけて駄作もないが深味のある自然味には缺けてゐる。寫生を本旨とする子規に紅葉が受人れられなかつたのは當然だ。集中の紅葉の句を少しばかり掲げてこの評の結とする。

狼の人喫ひし野も若菜哉

春寒や日長けて美女の嗽く

行雁の思切り(つ)たる高さかな

萱の葉に酢を乞ふと書き送りけり

睡足りて姑く蠅と相對す

秋の蚊の物思ふ臂を繞りけり

初冬や髭剃りたての男振

當時俳壇の流行調の面から木太刀を評すれば又異つた特色も見出せるであらうが私は句評を主題とするつもりではない。よつて省略する。

私は「新派俳家句集」と「俳諧木太刀」の二句集の成立と性格に就て考へて見た。成立の問題に關しては前者にあつては賣名といふ不純な動機があつたやうであり、且又日本派を裏切つたといふ烙印を捺されてあはれな消滅を遂げたのであるが、今日漸く物好きに取り出されて歴史的

記念すべき句集といふ地位を興へられることになつた。後者は秋聲會を背景として出版され、堂々とその存在理由を主張し得る立場にあつたが、これも日本派の勢力に壓倒されて結極微々として振はざる次第になつた。二つの句集の持つ性格はかくの如き成立事情に根ざすもので、即ち私出版書籍としてのこれらの性格を考へて見たのである。一體句集の價値は所載の句の價値によることはいふ迄もないが、私は書籍としての性格を考へようとしたのであるから、これらの句評に就ては出来るだけ觸れないやうにした。それは「新派俳家句集」が日本派の初期、「俳諧木太刀」が秋聲會の初期を共に代表するものであるし、この期の句評をなすには他の材料をも用ゐねばならず、その意味で必ずしもこれら句集を必要としないからである。句集といふものは常に過去の記念品として編まれるだけのもので、總じて句集がなつた時は既に次の句集が考へられねばならなかつたといふのが實情である。隨て句集はその藝術的價値よりも、それが如何なる時代を背景にし、如何なる流派の上に立ち、如何なる俳人によつて作られたか、その句集としての重要問題となるのである。そしてこの時代、流派、人によつて句集編輯の様式が異なり、更に装釘、體裁の上に乗てそれらの影響が及んでくるのである。で次にそれを逆にして句集を眺めることによつて編者の人を知り、流派の特色を見分け、時代の俳風を察知することが出来るのである。明治の俳句に限らない。明治の和歌も詩も小説も、それらの作品そのものを見ることによつて味ふことも出来るが、當時の出版物の體裁、装釘、編輯方法等を見ることによつてそれらの特色が引出されるのではあるまいか。私はこの方法を以て明治の二俳句集を眺めて見た。資料が不十分のため不明の點多く、論じ盡されなかつたことを遺憾に思ふ。

註1 「國語と國文學」二十七年八月號所載の「新俳句」に關する拙稿を参照せられたい。

註2 「木太刀」は竹冷趣味の句集であるが、「新俳句」中の俳人でこれにも見えるもの十八名、従つてこれら俳人の句で「新俳句」にえらばれ、且つこれにもえらばれたもの僅かながら見られる。麥人の「その中に田螺貝なる小石哉」は子規の「春夏秋冬」にもせられた。秋聲會派といひ日本派といひ、その區別は指導者間に設けられたもので未詳、投句家では共通のものもあつた。これも俳句活動の一つの性格を物語るといへる。

註3 二十六年十一月、東京大學國語國文學會研究發表會で「俳諧木太刀」のことどもと題して發表したものを多少整理したものが本論稿の「木太刀」に關する部分である。發表の時竹冷の句を私はよく言はなかつた。(久松教授の質問にお答へしたものの)、今でも私はこの考へを變へない。但し野田別天樓氏は「木太刀」の句では竹冷の句がよいと評された。氏の論は「俳諧研究」二卷十一號にのせられて居り、論題も本稿と同じ。研究發表の折は別天樓氏の論に氣付いてゐなかつたので久松教授にまことに不十分にお答へをしたものと今さら耻づかしく思つてゐる次第である。しかし私は私の感じたままを卒直に述べ、誰れの考へにも煩はされなまいと信ずる。因みに別天樓氏は日本派系であるが「秋の聲」の出刊當時はその投句家であつた。(一九五二、一〇、一四)「附記」 初稿後、近藤泥牛の「舊人物と新人物」と、題する書を見出した。それによれば泥牛のその後の消息も或程度わかるやうである。